慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「アメリカ自伝研究の方法論」
Sub Title	Comtemporary perspectives on American autobiography
Author	常山, 菜穂子(Tsuneyama, Nahoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.158(87)- 175(70)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「アメリカ自伝研究の方法論」
Contemporary Perspectives on American Autobiography

常　山　菜　穂　子

自伝文学というジャンルはアメリカ文学において大きな位置を占めている。植民地時代のピューリタンによる告白や日記に始まり，Benjamin Franklin の *Autobiography*, Jean de Crèvecœur の *Letters from an American Farmer*, Henry David Thoreau の *Walden*, Walt Whitman の詩，Henry Adams の *The Education of Henry Adams* など文学史の中で重要視されてきた古典の多くは自伝であるし，その後も数多くの作家が自己を語ってきた。またアフリカ系では Frederick Douglass から Richard Wright, Malcom X, 女性では Anne Bradstreet, Mary Rowlandson や Elizabeth Ashbridge から Gertrude Stein, Mary McCarthy, Lillian Hellman, そのほか先住民の Black Elk や移民作家，Maya Angelou や Maxine Hong Kingston ら二重の被差別者などによる自伝文学は，アメリカの社会と文化の多様性を鮮明に描き出す。もちろん自伝の伝統はアメリカや西洋に限られたものではなく，Georges Gusdolf は自伝を西洋特有の現象と主張したが，佐伯彰一によれば，セルフや神の概念は異なるものの日本にも平安女流文学に始まる自伝の系譜が想定できる。それでもなお，アメリカにおける自伝文学の一次資料の多さは特筆に値する。2冊の代表的な書誌には自伝，日記，回想録，書簡集などを含め，17世紀から1980年にかけて記された1万点以上のタイトルが列挙されており，80年以降については，テーマ別の書誌はあるもののもはや総括的な統計はなされていないほどである[1]。しかもこれら作品の多くが出版を目的とせず，純粋にセルフの記録として書かれたという点もアメリカ固有の特徴である。自伝文学はまさにアメリカ的表現の主流をなすと言えるだろう。

しかしながら一次資料の氾濫に比べ，自伝が本格的に文学研究や批評の対象として扱われるようになったのは，ここ20年ほどのことである。1964年に Robert Sayre が自伝文学を博士論文のテーマにすることについて "Such a project may need certain explanation and justification." (xxv) と前置きしたように[2]，初期の研究書には自伝を扱うことに対する言い訳や自己弁護，あるいは自伝研究のマイナーさへの嘆きがよく記されていた。しかし Sayre から30年後の今日，自伝文学は批評の場で最も注目を集める分野のひとつにまで成長を遂げた。それは60年代に執筆されその後長く絶版となっていたアメリカ自伝の最も初期の研究書―― Roy Pascal, Sayre, Daniel Shea らのもの――が80年代後半になっって次々と再版された事実を見ても分かるだろう[3]。アメリカにおける自伝研究の方法論はいかなる変遷を経て来たのか。

I. 自伝研究の形成

たとえば自伝の発祥については，17世紀の宗教的自伝と18世紀の近代的自伝に起源を求める説が一般的ではあるが，Georg Misch や Arnoldo Momigliano のように古代まで歴史をさかのぼる者もいる。こうした学説の違いはひとえに自伝とは何かという基本概念の違いによる。古代人と近代人とではセルフ観は違うし，Misch や Momigliano とそのほかの研究者とではどの作品までを自伝と見なすかも違うはずである。この自伝の定義付けの曖昧さ，困難さこそ自伝が文学研究の対象として扱われるようになるのを遅らせた原因であったと考えられる。自己を物語る人を自伝作家と定義しても，自己を物語る手段は自伝以外にも回想録や日記，エッセイ，自伝的小説や自伝劇などさまざまな形を取り得る。その内容は芸術としては創造性が欠けており客観的過ぎるし，歴史としては主観的過ぎる。自伝とはひとつのジャンルなのか，それともほかのジャンルに内在するひとつの要素なのか。一体，文学批評の対象となり得るのか。

初期の自伝研究の最大の障害は，50年代まで影響力を発揮した新批評（ニュー・クリティシズム）であった。William Wimsatt や Monroe Bearsley

といった新批評の批評家は文学作品は公共的領域における対象物であるから，自伝や伝記，日記，創作ノートなどに表れた作者の経験や意図を作品の意味や効果，出来栄えを判断する基準とすることは「意図を読む誤謬」だと考えたのである。こうした新批評においては，自伝が研究対象としての価値を見い出される余地はなかった。しかし50年代に入って作者，読者，時代性その他すべての外的要因を排除して作品をひとつの構造物ととらえる新批評の根本姿勢そのものが疑問視されるようになると，その新批評の衰退と呼応するようにアメリカ批評界で自伝への関心が高まって行く。それに先立つ1948年に既に Rebecca Calmers Barton のアフリカ系の自伝に関する *Witness for Freedom* が出版されており，この研究書はアメリカ初の本格的な自伝研究書であったのだが，当時いまだ注目度の低いアフリカ系のしかも自伝を扱っていたため正当に評価されることはなかった。実際のアメリカ自伝研究の発端となったのは，1964年の Sayre による *The Examined Self* である。

なぜ60年代に自伝研究熱が高まったのか。その原因のひとつは言うまでもなく，批評の分野で新批評に対する反動が起きたことであろう。その一方で60年代ラディカリズムによるマイノリティの勃興という当時の社会状況の影響を見逃すことはできない。アメリカの若返りを唱えるＪＦＫが凶弾に倒れると50年代からくすぶっていたさまざまな歪みが表面化し，公民権運動，女性解放運動，大学紛争，公害反対闘争，ベトナム反戦デモなどの過激な反体制思想が活発化する。こうした政治的・社会的変容が文化や文学に与えた影響は計り知れない[(4)]。特に，60年代から70年代のマイノリティ運動の結果，彼らの手による過去の作品に光が当てられると共に，実際に自己主張の手段として多くの自伝が執筆され，研究の一次資料を提供することとなったのである。このことは書誌の統計上も明らかで，植民地時代から1945年までの200年間を網羅する Louis Kaplan が6377点の作品を挙げるのに対し，Mary Briscoe によると1945年から1980年までのたった35年間には5008点もの自伝文学があり，しかも60年代以降の作品が非常に多い。これらは日記，回想録，書簡集なども含まれた上での数字ではある

が，しかし明らかに一次資料の氾濫が自伝研究熱の背景にあると思われる[5]。

60年代に始まったアメリカにおける自伝研究の軌跡をたどると，70年代に入ってから研究の方向が大きく二つに分かれたことが見て取れる。ひとつは長く歴史や文化の表舞台に立つことのなかった女性やアフリカ系，先住民らマイノリティの自伝を発掘，分析することで彼らを新しくアメリカの中に位置付けようと試みる「文化的」アプローチ。もうひとつは，自伝というテキストそのものの持つジャンルや言語の問題，あるいはセルフに関する認識論的問題を解明しようと試みる「構造的」アプローチである。これら研究の二大傾向は今日まで続いており，多くの自伝研究書が出版されるものの方法論は大方この二つのアプローチに分類できると思われる[6]。

II．自伝研究の詩学

（A）文化的アプローチ

前述のようにアメリカにおける最初の自伝研究書はアフリカ系の作品を対象としたものであったが，これは極めて例外的なケースで，初期の研究はいわゆる白人男性中産階級を主に扱っていた。Sayre は *The Examined Self* で Franklin, Adams, Henry James を論じて，後に John Paul Eakin によって主流の作家を扱うことで文学史すべてを語ろうとするその姿勢を批判されている[7]。James Cox が "Autobiography and America" で取り上げたのは，Franklin, Thoreau, Whitman, Adams らであった。また Shea は女性作家も扱うが，それは "spiritual autobiography" というピューリタンの伝統による枠組み解明の例題としてであり，女性であるという特質が深く言及されることはない。植民地時代からマイノリティの手による自伝文学は詩や紀行文，奴隷体験記，インディアン捕囚体験記，回心体験記などの形で存在した。しかしアメリカの独立と建国を支えた啓蒙思想は白人男性中心で，共和制下では女性は男性の被保護者，アフリカ系は白人の「財産」，先住民は搾取される者とされており，その自伝が批評の対象となった

り，芸術的価値を認められて文学史のキャノンに組み込まれたりすることはなかった[8]。時代が下り70年代になってようやくマイノリティの自伝が本格的に批評界で脚光を浴びるようになるが，この「文化的」アプローチの高揚は，前述の通り60年代の公民権運動などの少数民族によるエスニック・リバイバルそして70年代の女性運動といった社会的変動の反映であり，Linda Hutcheon 流のポストモダニズム文化到来の結果である。マイノリティは自分と自分が所属する民族やグループの過去を振り返り，アイデンティティを模索し，それを書き留めては次々と出版した。Sayre は "Autobiography and the Making of America"[9]で Douglass を例に出して，マイノリティが識字能力を得て自分の人生を語ることはすなわち "an articulate hero, who can use the power of language and persuasion to tell his own story and use it in the liberation of other men and women" になることだとして，マイノリティにとって自伝は創作よりも効果的だと考える。

> The assumed accuracy and authenticity of autobiography——its historicity——give it greater authority than the fictions of novels or the theater, especially since the fictions are more likely to have been written by whites or people who have not had these experiences themselves. (167)

自伝を執筆し出版するという行為自体が長い間，主に白人男性にのみに許された特権であった事実を思い起こせば，マイノリティの自伝が出版されたことだけでも彼らの運動の効果を示すと言えよう。

反面顕在化したのが，マイノリティの自伝に対する白人文化の見えない影響である。これは特に白人が少数民族から話を聞き，それを本にまとめる共同制作の場合の問題点が指摘されている[10]。文字文化を持たなかったり識字率の低い集団に対して歴史家や文化人類学者が取材を行い，そのインタビューを聞き手がまとめて語り手の自伝として発表する——こうした共同制作の自伝は多くのマイノリティに自分を語る機会を与える一方で，執筆・出版・流通というシステムが書き手である白人の支配下にある以上，白人文化の基準に沿った価値判断と題材の取捨選択は避けられない状況に

ある。その結果，共同制作の自伝は支配層の理想とする少数民族像を語るだけの場になり，またこうして押し付けられたモデルを少数民族の側が，意識的にか無意識的にか受け入れてしまうという皮肉な結果を生み出す。さらに初期アメリカの少数民族による自伝についても，それらが元奴隷は白人奴隷制廃止論者の，先住民は白人人類学者の後盾を受けて成り立っていた事実から，同様の影響が推察できる。

研究熱の高まりの背景には，マイノリティに対する周囲の関心の増大，つまりマイノリティによる自伝に対する読者層の形成もあった。供給があってもそれに見合う需要が確保されなければ，彼らの自伝が出版・流通にまでたどり着くことはなかったであろうし，批評対象として注目されることもなかったであろう。自伝研究の第一人者 Phillippe Lejeune は自伝の成立時期について論じる際[11]，時期を推定する決め手のひとつとして読者層の形成を挙げる。

> 自伝というのは，書かれた作品によって規定されるのと同様，それを「読むという行為」によっても規定される。文明史や文学史の観点からみて自伝が正当な現象になるのは，生産に消費が対応するようになって以降，つまり読者大衆が誕生して以降のことに過ぎない。(40)

自伝的なテクストは数多く書かれていても，それらは語られている出来事の歴史的，政治的，社会的意義によってしか評価されていなかった。一個人の生涯の物語に価値を認めてそれを「読むこと」に関しての興味は1760年頃に生じて来た。故に Lejeune は近代的自伝の成立を18世紀半ばと定めるのである。同様のことがマイノリティの自伝成立についても言えるのではないか。1968年のＭＬＡ大会における New University Conference などを経て，キャノンに対する議論が展開されるようになった結果，マイノリティへの関心が高まり，“gender, class, race” をキーワードに過去の作品が見直され現在の作品が注目されるようになったことは周知であろう。

（Ｂ）構造的アプローチ

初期の構造的アプローチの典型的なものは，自伝を理論的に定義付けよ

うとする試みである。果たして自伝は小説や詩，劇または悲劇や喜劇，あるいはフィクションやノンフィクションといったものと同列でとらえ得るひとつのジャンルなのか。試みの裏には，文学批評の場で自伝が異端視されてきたことへの批判と，新批評の影響が未だ消えぬ時代に自伝を研究対象とすることへの弁護の意味合いが隠されていたと思われる。*OED* による自伝の定義は "a story of one's life written by himself" と非常に広義なため，個々の研究家がそれぞれの解釈を繰り広げたが，その定義付けに最も情熱を傾けたのは Lejeune であった。彼は『フランスの自伝』と『自伝契約』を通して「実在の人物が，自分自身の存在について書く散文の回顧的物語で，自分の個人的生涯，特に自分の人格の歴史を強調する場合」と定義付け，作者と語り手と主人公の同一性を絶対条件に挙げる。そして回想録や伝記，私小説，日記，自画像など「自伝的なもの」との差異を細かく分析してみせる(12)。

Lejeune は複数の例題の考察を通して自伝と見なされる作品に共通する成立条件を捻出したが，1980年に William C. Spengemann は *The Forms of Autobiography*(13)で「自伝」という制約そのものの無意味さを唱えて，ジャンル論争に決着をつける。Spengemann によれば時代を特徴付けるような自伝のかたちはセルフの概念が変遷するにつれて進化して来た。すなわち16世紀にヨーロッパで近代的自我が成立すると歴史の中に個人を位置付ける「歴史的なかたち」が，18世紀から19世紀にはより自我意識を追求する「哲学的なかたち」が発展し，そして19世紀にロマン主義的セルフが揺らぐと内面の変化を象徴的に表す「詩的なかたち」へと移行したのである。今日の自伝はこれら三つの内のいずれかまたは複数からなり，その中でも作者のセルフの分裂や喪失を最も良くとらえて表現することができる「詩的なかたち」が主流を占めている。Spengemann は自我の存在は言語行為に依存しており，進化が進み最終的な「詩的な自我創出」という言語手順を果たした作品として Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) を挙げる。Hawthorne はセルフは私的な面と社会的な面からなると考えて，自分の分裂した内面を感情的な Hester，道徳的な Dimmesdale,

二人の間に立つ解釈者のChillingworthという三人の登場人物で表現した。物語が葛藤状態から始まることが示すように，Hawthorneは物語の行程を通してこの分裂し対立する三面の和解を試みる。しかしやがて解決の場は作品外部には存在せず作品内部——言語行為の場——にのみ存在すると悟る。物語の最後にHesterとDimmesdaleは緋文字の刻まれた墓碑においてひとつとなるが，作者の分裂した内面 *The Scarlet Letter* という作品において和解するのである。セルフは言語行為によって創出されるものであり，書かれたものはすべてそれが構築するセルフについて語ることになる。故に「自伝＝言語行為」となり，*The Scarlet Letter* 以降「自伝」はもはや特定の種類の作品のみを指す特殊な文学形式ではなくなるのである(14)。

構造的アプローチがより盛んになるのは，アメリカの批評界が次々と新しい外国の文学理論にさらされて理論の時代を迎えてからのことである。近代的自伝はロマン主義のセルフへの関心の高まりから成立したのであるが，60年代にフランスの構造主義，ポスト構造主義，ディコンストラクションの批評家たちから，自伝の基盤となっているそのセルフとは何かという問いかけが起きてくる。特にJacques Derridaのディコンストラクション批評がアメリカ批評界に熱心に受け入れられると，1976年のElizabeth Brussの *Autobiographical Acts* を皮切りに自伝テクスト内部の問題に目を向けた研究方法が一気に高まり，James Olney編集の *Autobiography : Essays Theoretical and Critical* (1980) によって体系化されるのである。構造主義以後の批評に共通するのは西洋思想の伝統的なセルフへの信頼を見直す姿勢であり，自我の問題の背後に潜む言語の問題を重視する。批評家が今日かつて研究対象として忘れられていた自伝を盛んに取り上げるのも，自伝の核にまさにこの自我と言語の問題が内在するからである(15)。

Derridaによれば自伝テクストには，もともとディコンストラクトされる基盤が備わっていた(16)。Derridaは「ロゴス中心主義」と話される言葉に特権を与える「音声中心主義」とを結び付け，「自らが話すのを聞く」"s'entendre parler" という考えを持ち出す。不完全な思考伝達の媒介シス

テムである「書くこと」に対して「話すこと＝声」は同じく媒介の働きをするが，記号表現（シニフィアン）は発せられた瞬間に消えてしまうため，意味と自然で直接的な関係を有するように思われる。つまり人が話す瞬間，物理的な記号表現は精神的な記号内容（シニフィエ）へと完全に還元されるので，自分が話すのを聞くことと理解することは同時に起こる。この「自分が話すのを聞く」時，人は思考に直接接近できるように感じられ，自己の現前性が体験されるように思われるのである。そしてDerridaによれば自伝を書くことは，自分の人生について「自分が話すのを聞く」ことにより人生を「永遠回帰**としての**（この）物語」に変えて，自己現前を試みることである。

> ……この物語が**自**—伝［自—生—的］的であるのは，……この生を彼が**自らに**物語っており，彼がその語りの——テクスト内部での——唯一ではないにしても最初の受取人［destinataire］であるからにほかならない。……この「私」は，永遠回帰**としての**この物語以前には存在しないし，また署名もしない。そこまでのところは，**現在**［贈物］**までのところは**，生きている私とは，おそらく，一つの**予断**［偏見］にすぎない。署名する，あるいは捺印するのは，永遠回帰なのである。(21) [17]

そしてautobiographie（自伝）を，otobiographie（oto＝耳，耳伝）ともじってみせる。Derridaが解体するのはこうした現前性を基調とする理論である。話される言葉においては，記号表現が消え去るので記号内容が現前するように思われるが，話される言語もやはり物理的なもので他のものとの「差異」の働きによって機能する。「自分が話すのを聞く」時に体験されると思われた自己現前は，実は差異によって産出されたものであった。よって現前性に根拠をおく理論も—自伝も—あらかじめ内包する脱構築的な契機を含む。

Derridaに比肩するデコンストラクション系自伝批評の代表的なものは，イェール学派の指導者Paul de Manが1979年に発表した“Autobiography as De-Facement”[18]である。まず従来の自伝はフィクションよりもよ

り単純なモードの指示性や表象，ディエゲーシスに属すると考えて両者の区別をつけようとする傾向に異議を唱え，自伝の指示性を疑う。…

> …is the illusion of reference not a correlation of the structure of the figure, that is to say no longer clearly and simply a referent at all but something more akin to a fiction which then, however, in its own turn, acquires a degree of referetial productivity? (69)

自伝は自伝の言説によって作り出されるものであり，フィクションとの区別はどっちつかずの回転ドアに迷い込む。それと言うのも自伝の持つ「比喩的言語構造」"the tropological structure" が原因なのである。この自伝のディコンストラクティヴな構造を説明するために，墓碑銘と自伝に共通するレトリックである「活喩法」"prosopopeia" が取り上げられる。活喩法において死者があたかも話すようにすることは，すなわち死者（過去の自分）に声，口そして「顔」を与えることである。その点でこのレトリックは自己回復の言説と言えるが，一方で死者に声を与え顔を与えることは，生者（現在の自分）の声を奪い「顔を消す」"deface" なのである。自己回復の言説は，自己剝奪の言説でもあった。すなわち自伝の face は figure であり，de-facement は disfiguration の道をたどらざるを得ない[19]。

自伝の比喩的言語構造に着目した de Man は，自伝ジャンルそのものの本性を明らかにした。Michael Sprinker は自伝のセルフが言説の構築物であることを明らかにしてついに "the end of autobiography" を宣言する[20]。

> The origin and the end of autobiography converge in the very act of writing…for no autobiography can take place except within the boundaries of a writing where concepts of subject, self, and author collapse into the act of producing a text. (342)

しかし Sprinker に対して，この論文を所収する批評書の編者 James Olney はあからさまに不満を申し立てる[21]。セルフは言語によるテクストの内部にのみ存在し外部には何もないとする自閉性は，構造的アプローチのみならず構造主義，ポスト構造主義，ディコンストラクション全般に共

通する弱点でもあった。このような一種の汎テクスト主義が必然的に向かったのが，ディコンストラクションの手法を用いつつもそこに歴史性の観点を持ち込むニュー・ヒストリシズムである。

III. ニュー・ヒストリシズム以後の自伝研究

テクストのディスクール分析を行いつつ，それをつき動かす歴史に目を向ける Michel Foucault の理論を取り込み発展するアメリカにおける文学批評の歴史指向は，Stephen Greenblatt の *Renaissance Self-Fashioning* (1980) を機にニュー・ヒストリシズムとして急速に高まり，80 年代後半にはディコンストラクションに代わる批評の新しい指標となった。従来の歴史学では，要人や事件に焦点を当てて史料や統計を元に客観的史実を浮かび上がらせようとする実証主義が主流であった。しかしアナール学派らにより基本的歴史観に変化がもたらされ，歴史は単一ではなく多様な人物や出来事が織り成す多層のものだと考えられるようになる。史料はひとつの客観的な事実を示すことはなく，それに携わる個々の関係者や背景となる文化の支配的イデオロギーの潤色を免れない。歴史が言語行為によって語られ書かれるものである以上，それは物語である。事実があるから歴史が生じるのであるが，一方で語り手，書き手の読みがあるからこそ歴史はその読みの産物として創出されるのでもある。

ニューイングランド植民に関するピューリタンの予型論を思い出せばよい[22]。時間的順序に沿って植民の歴史を読めば，ピルグリムファーザースは母国を追放されて新大陸へ逃れたことになる。当時ピューリタンは数多くの自伝，日記，インディアン捕囚体験記や回心体験記を書き記したが，これは日々の宗教的経験を記すことで己を顧みて告白と自己開示の手段とするためであったと取れる。その一方で John Winthrop が1630年に行った演説 “A Model of Christian Charity” に明確に表れているように，ピューリタンは自分たちは神に選ばれて神の国を建設するために新大陸にやって来たという物語的秩序に沿った読みも展開する。植民の経緯を出エジプト記になぞらえ，自らをエジプト（＝イギリス）から荒野（＝大西洋）を抜

けて約束の地（＝アメリカ）をめざすイスラエルの選民に見立てたのである。歴史家や伝記作家の仕事はピューリタンがいかに神と特別な関係にあるかを証明することとなり[23]，歴史はこの読みに合わせた物語となった。こうした読みの背後にあるのは，神の名を借りて民衆を操作し神権政治を強化しようとする教会の意図であり，self と piety という二項対立を掲げて self の滅却と神への piety を推奨したのも世俗的な策だったといえる。となればピューリタンの自伝も，純粋に個人の信仰心からのみ生まれたとは考えにくい。当時人は口頭か記述による内省と信仰告白が求められ，それが教会の一員としての資格を判断する材料に使われていた[24]。つまり自伝は個人的な自己開示の手段である以上に多分に公的なものであり，共同体への忠誠を強化するための政治的な装置という一面が考えられるのである。

こうした歴史観の変化を全面的に援用するニュー・ヒストリシズムの方法論は，アメリカの自伝研究を考察する上で見逃すことはできない。というのも，前述した植民地時代の自伝文学――特に奴隷体験記，インディアン捕囚体験記，回心体験記――が批評の対象として顕在化したのは，まさに Foucault 以後の新しい歴史学が形成された結果だからである。従来アメリカの民族性を考える際は，1890年以降の移民が大きく取り上げられる傾向にあった。しかし今一度歴史を顧みれば，アメリカ人とその文化の形成そのものがさまざまな民族と対峙し彼らを取り込むことで初めて達成されたのであり，初期アメリカにおける民族性が浮かび上がるのである。Frank Shuffelton 編集の *A Mixed Race : Ethnicity in Early America*[25] は，最も早い時期から既にアメリカの社会と文化は豊かな民族性に彩られており，アメリカ人は "a mixed race" であったという前提から始めて，インディアン捕囚体験記と奴隷体験記を論じる。David R. Sewell によれば，先住民により拉致された白人は肉体的にも文化的にも捕囚となるが，生還するやその体験を書き記すことにより逆に彼らに復讐を果たす。識字は力であり，白人の解釈と言語を経て出版された捕囚体験記は白人の読みによる物語となるのである。更にステレオタイプ化されるインディアン捕囚体

験記でも，語り手の宗教，国籍，性別という立場や私生活の状況の違いによって差異が生じる。たとえば白人社会の中心的人物として集団の一員であることを強く意識していたJohn Williamsと，白人としては周辺的であった人物とでは，先住民に対する「他者」の概念も異なるはずだとRosalie Murphy Baumは論じる。息子の改宗という個人的側面も加わり，Williamsは先住民に対して厳格な他者意識を持つに至ったという。

創作の過程において，さまざまな要素が作者の主体の有り様により葛藤状態から選別され，またテクストにはその時の社会，政治，文化のイデオロギーがせめぎ合いひとつに分節化され織り込まれるのである。そしてこうした見地に立てば，従来のアメリカ文学史も白人男性中心の選別とイデオロギー介入により構築されて来た一面的な物語ということになり，80年代末から次々と刊行されているニュー・ヒストリシズムの文学史は必然的に，植民地時代の自伝文学そして自伝分野全般に光を当てキャノンの再構築を試みるものとなっている(26)。

そもそもなぜアメリカでは自伝文学が盛んなのか。なぜアメリカ人は自己を語ることに熱心なのか。自伝研究の課題は，自伝の根本をなすアメリカン・セルフの解明へと派生する。ここで結論を引き出すために，アメリカ的ニュー・ヒストリシズムの元祖とも目されるSacvan Bercovitchの*The Puritan Origins of the American Self*を振り返るならば，彼がそこでCotton Matherが*Magnalia Christi Americana*（1702）においてWinthropに与えた「アメリカのネヘミア」"Nehamias Americanus"という呼称に，アメリカン・セルフの原型を見い出しているのは啓示的である。Matherはピューリタンの指導者Winthropを神の国建設に尽くした旧約の予言者Nehemiahという予型に当てはめ，NehemiahであるWinthropは個人を超越したアメリカ人の代表であるとしたのだが(48)，BercovitchはこのWinthrop像に世界の指導者としてのアメリカ人の使命感と自信を見い出すのである。そしてMatherの個人の歴史を国家の歴史と読み替える意図を汲み，*Magnalia*を"auto-American-biography"と呼ぶ。(134)

Bercovitchはまた，アメリカの自伝の根底を流れるセルフへの執着の原

点とも言えるピューリタニズムのセルフ観を解き明かす。従来の研究ではピューリタンの自伝は自己を正直に告白する手段と考えられてきたが，実際のところは前述の通り自己は抑圧されていた。しかし自己を克服し滅却しようとすればするほど，自己への関心は高まっていき、self と piety の対立の間でピューリタンは "Sisyphus" となる。

(19) その葛藤による精神的負担はすさまじく，ヒステリーや精神異常，自殺も頻繁だったという。この強いセルフへの執着が，今日に至るまでアメリカ人の精神とそして文学の根底に流れ続けているのである。

自己滅却と神への奉仕を唱えたピューリタニズムと裏腹に生まれたセルフへの執着は，次世代の建国期により強固なものとなる。この時期，欧州からのロマン主義の影響に加えて，社会的にはイギリスへの反抗から独立革命，合衆国の基礎造りという政治的動乱期にあたりナショナリズムの高揚をみた。この2つの要素が合わさり，アメリカに近代的自伝が成立する。Karl Weintraub は近代的自伝の成立には18世紀末に芽生えた「歴史意識」"historical consciousness" が不可欠だったと考えた[27]。歴史の流れの中で現在は過去とは異なるのだという新しい歴史観が，社会の中で自分は他者とは異なるのだという認識とあいまって，近代的自伝成立の基盤となったというのである。Weintraub は欧州の自伝を研究対象としているのだが，その説は建国期のアメリカの自伝成立背景にも当てはまる。イギリスからの独立運動は，イギリスとの差異に敏感になった「アメリカとは，アメリカ人とは」という問いかけから始まった。イギリスの物理的束縛を逃れたアメリカという国の創造は，イギリスの精神的束縛を逃れたアメリカン・セルフの創造でもあった。アメリカの近代的自伝の始まりであるとされる Franklin の *Autobiography* が，自己と国家を重ね合わせて彼自身の人生の記録というよりもアメリカの誕生と成長のイメージを伝えるのは，こうしたアメリカ独特の事情を反映してのことである。

さて Bercovitch は *The Puritan Origins of the American Self* でアメリカン・セルフの原点をピューリタニズムに求めたのであるが，更に昨今その Bercovitch の読み直しを図り，ポストモダン・セルフの起源をもアメ

リカに求めるのが，Cotton Mather と Thomas Pynchon の差異さえディコンストラクトする Martin Gloege の "The American Origins of the Postmodern Self" [28]である。「後期」資本主義の発展によりもたらされた消費社会の到来をポストモダニズムの特徴ととらえる Fredric Jameson の理論を援用する Gloege は，細分化され記号化されたポストモダン・セルフの原因を，戦後アメリカ特有の経済状況とそれを担うアメリカ中産階級に見い出す。第二次大戦後——とりわけ60年代——にアメリカ資本は安い労働力を求めて第三世界へと進出し，その結果，マルクス主義的な労働主題に女性労働者を巡る「男対女」というジェンダーの要素を加えた問題が国際レベルで生じた。それまで国家の枠組みの中でとらえられて来た二項対立的な上下関係は国外へと拡大され，新たに多元的な階級闘争を生み出す。一方で消費文化の担い手である中産階級は，市場の国際化による第三世界のアメリカ化を前に精神的危機に陥る。経済的・文化的に統一されていた価値観は多元化され，アメリカ人は国家やセルフという概念の再定義を迫られることとなったのである。Gloege はこうしたアメリカという国と独占的資本主義という経済機構を基盤としたアメリカ中産階級の伝統的セルフの崩壊が，ポストモダン・セルフを生み出したと考える。こうした Bercovitch のアメリカン・セルフから Gloege のポストモダン・セルフへ至る理論的発展の内部に，今後の自伝研究が課題とすべき「主体」のありかを認めることができるのではないか。

註

（1） 代表的なアメリカの自伝書誌である Louis Kaplan, et al. eds. *A Bibliography of American Autobiographies* (Madison: Wisconsin UP, 1961) と Mary Louise Briscoe, et al. eds. *American Autobiography 1945-1980 : A Bibliography* (Madison: Wisconsin UP, 1982) は植民地時代から1980年までを網羅する。テーマ別では，David Brumble. *An Annotated Bibliography of American Indian and Eskimo Autobiographies* (Lincoln: Nebraska UP, 1981) や Patricia Addis. *Through a Woman's I* (Metuchen: Scarecrow, 1983), Russel Brignano. *Black Americans in Autobiography* (Durham: Duke UP, 1984) など。

(2) Robert Sayre. *The Examined Self : Benjamin Franklin, Henry Adams, Henry James.* 1964. (Madison : Wisconsin UP, 1988)

(3) Roy Pascal. *Design and Truth in Autobiography.* 1960. (New York : Garland, 1985) ; Daniel Shea. *Spiritual Autobiography in Early America.* 1968. (Madison : Wisconsin UP, 1988)

(4) 60年代ラディカリズムはアメリカにおける自伝文学興隆の一つの発端となり，その後の研究を促進させることとなった。その一方で80年代になってから吹き出した，こうした文学の場への社会思想の侵入に対する保守派の批判も見逃せない。Allan Bloom は *The Closing of the American Mind* (New York : Simon & Schuster, 1987) でマイノリティを受け入れた60年代の教育改革は，アメリカの知的精神の衰退を招く結果となったと嘆く。アメリカ大衆の深部で進行する反リベラリズムは，同書がベストセラーとなった事実からも明白である。

(5) James Cox は1971年の段階で，社会と文学の連動を示唆して，自伝の人気が高まったのは過去10年間（すなわち60年代）に，文学という概念そのものが変化したためだと理由付ける。ラディカリズムに端を発した意識改革の結果，"politics and history become dominant realities for the imagination" (252) となり，小説よりも自伝やエッセイが好まれるようになったというのである。James Cox. "Autobiography and America." *Virginia Quarterly Review* 47 (1971) : 252-77.

(6) 一方でこれら二つとはまったく異質のアプローチの傾向も見受けられる。80年代における定義解釈の柔軟化を受けて，「文学」の範疇に入らないような絵画，写真，映画などの言語によらない手段を使った自己表現をも自伝研究の対象とするのである。たとえば絵画については William Howarth. "Some Principles of Autobiography." James Olney, ed. *Autobiography : Essays Theoretical and Critical* (Princeton : Princeton UP, 1980), 84-114. や Phillippe Lejeune. "Looking at a Self-Portrait." *On Autobiography* (Minneapolis : Minnesota UP, 1989), 108-18, 写真については Paul Jay. "Posing : Autobiography and the Subject of Photography." Kathleen Ashley, et al. eds. *Autobiography and Postmodernism* (Amherst : Massachusetts UP, 1994), 191-211., 映画については Bruss, Elizabeth. "Eye for I : Making and Unmaking Autobiography in Film" Olney ed. *Essays Theoretical and Critical*, 296-320. など。

(7) Paul John Eakin, ed. Intro. *Fictions in Autobiography : Studies in the Art of Self-Invention* (Princeton : Princeton UP, 1985), 11.

(8) Robert Ferguson. "The Limits of Enlightenment." Sacvan Bercovith, ed. *The Cambridge History of American Literature : Volume One*

1590-1820 (Cambridege : Cambridge UP, 1994), 496-537.

(9) Robert Sayer. "Autobiography and the Making of America." Olney ed. *Essays Theoretical and Critical,* 146-68.

(10) Lejeune. "The Autobiography of Those Who Do Not Write." *On Autobiography,* 185-215.

(11) フィリップ・ルジュンヌ『フランスの自伝』(1971) 小倉 孝誠訳　法政大学　1995

(12) フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』(1975) 花輪 光訳　水声社　1993 : 16-18.

(13) William C. Spengemann. *The Forms of Autobiography : Episodes in the History of a Literary Genre* (New Haven : Yale UP, 1980)

(14) Spengemann 以降，自伝研究で取り上げられる作品の幅は格段に広がりを見せる。定義付けに関して後進の研究者に多大な影響を与えた Lejeune も，80年代に入ってから自説に大きな修正を加えるに至るのだが，その過程は『フランスの自伝』の「日本語版へのあとがき」に詳しい。

(15) Eakin は，自伝作家自身がセルフに疑問を抱く今日の自伝研究における主題は，自伝におけるセルフの存在論的位置の解明であると断言する。Eakin. *Fictions in Autobiography,* 181-82.

(16) 以下 Derrida の「自分が話すのを聞く」については，Jonathan Culler. "Writing and Logocentrism." *On Deconstruction : Theory and Criticism after Structuralism* (Ithaca : Cornell UP, 1982), 89-110. を参考にした。

(17) ジャック・デリダ「ニーチェの耳伝」
C. I. レヴェックほか編『他者の耳』浜名 優美ほか訳 (産業図書，1988)

(18) Paul de Man. "Autobiography as De-Facement." *The Rhetoric of Romanticism* (New York : Columbia UP, 1984), 67-81.

(19) Cynthia Chase は以下のように説明している。

> De Man not merely reads *prosopopeia* as the giving of face ; he reads *face* as that which is given by prosopopeia. ……It [Face] is a mode of discourse, given by an act of language. What is given by this act is figure. Figure is no less than our very face. "Face" is a figure. (84)

Chase. *Decomposing Figures : Rhetorical Readings in the Romantic Tradition* (Baltimore : Johns Hopkins UP, 1986)

(20) Michael Sprinker. "Fictions of the Self : The End of Autobiography." Olney ed. *Essays Theoretical and Critical,* 321-42.

(21) Olney. Intro *Essays Theoretical and Critical.* 22-23.

(22) 以下 *Robert Bellah. The Broken Covenant : American Civil Religion at the Time of Trial* (New York: Seabury, 1975) と Sacvan Bercovitch. *The Puritan Origins of the American Self.* (New Haven: Yale UP, 1975) を参照した。

(23) Lowance Jr., Mason. "Biography and Autobiography." Emory Elliott, ed. The *Columbia Literary History of the United States.* (New York: Columbia UP, 1988), 67-81.

(24) Shea, xiv-xvii.

(25) Frank Shuffelton, ed. *A Mixed Race : Ethnicity in Early America* (New York: Oxford UP, 1993) David R. Sewell. ""So Unstable and Like Mad Men They Were": Language and Interpretation in American Captivity Narratives", 34-55. と Roslie Murphy Baum. "John Williams's Captivity Narrative: A Consideration of Normative Ethnicity", 56-76. を収録。

(26) Elliott, ed. The *Columbia Literary History of the United States* (1988) ; Elliott, ed. *The Columbia History of the American Novel* (New York: Columbia UP, 1991) ; Bercovitch, ed. *The Cambridge History of American Literature : Volume One 1590-1820* 1590-1820 (1994), *Volume Two : Prose Writing, 1820-1865* (1995, 以下続刊) など。

(27) Karl Weintraub. "Autobiography and Historical Consciousness." *Critical Inquiry* 1. 4 (1975) : 821-48.

(28) Martin Gloege. "The American Origins of the Postmodern Self." George Levine, ed. *Constructions of the Self* (New Brunswick: Rutgers UP, 1992), 59-80.